

詩誌 新聞詩 第2号

2024年7月7日 詩誌新聞詩倶楽部発行



目次

そうなのかな

新川 亮

4

踊る煮干しのフィーバー

新川 亮

6

新聞紙の片隅に

田宮 ケンジロウ

8

春の訪れ

大元 無為

1
1

死語

大元 無為

1
3

人と紙(神)のつぶやき

鎌田 東二

1
6

くまほうどう くまそうどう くまとうそう
いかり

鎌田 東二

2
1

鎌田 東二

2
5

クマ報道② 平安京瓦版第1号

鎌田 東二

2
8

編集後記

新川 亮・田宮 ケンジロウ・大元 無為・鎌田 東二

奥付

3
5

3
3

そう なの かな

新川 亮

なぜかここにあるものと

そうしたときにあったこと

どうしてかわだかまりをかんじたふたり

でたらめみたいなわらいごえ

いたくて

ちよつと

だんまりきめこむそのあとで

はんどうてきなこえをきいた

あいたいするわたしたち

そういったあとでわすれてて

たいていのことはどうでもよいと

とおりすぎるかんかくのなか

なにかがのこつてきえたみたい

だれかさんがだれかさんが

だれかさんがいったんだ

そうしてのこったなにかにふれて
いみをぼくはずとかんがえてる
ここにはなにもないのにね
のこったものなどひとつのこらず
かぜがふいていっちゃった
それでもかすかにのこってる
そういうふうにねがってる
だからかな
そうだな

踊る煮干しのフィーバー

新川 亮

ふらふら、とんとん、春の気配

街は賑わい、色とりどり

ラーメンつるつる、味わい深く、頭はぼっ

歩けば歩く、すれ違う記憶と気持ち

あなたと徘徊、再会の今朝

湯気に見とれて、鼻腔をひらく

花より団子、世は流々

へんてこりんなワイキキビーチ

はなればなれのファンタスティック

彼との約束、間違いだらけのチャーシュー

丁寧な脇腹、押さえたハンカチーフ

誰も彼も何もかも

ホントも嘘もあいまいな果て

目眩に狂い

信じられないほどの大炎天

思えば涼風、遥かどこか、あの子の影揺れ

たまたま明日の苛立ち捨てて

公園横の大黒天

壊れてこなごな、粉まで、ここまで

たこ焼きビーバー、黒い川

乾いた笑いに、苦々と

メタとベタと、反転しながら世界

いかれたぼくのベイバー

メロディーもつと、踊る煮干しのファイバー

新聞紙の片隅で

田宮ケンジロウ

〈詩のように記事を書きたい〉

憎しみ、と 哀しみ、と 悪意に支配された

ニュースペーパーの片隅に

蠟燭の灯のような詩があったらステキだから

おらほの新聞 新年最初の女性投稿欄名物『係から』の

最初で、多分、最後のギフト

〈わたしは／わたしの人生から／出ていくことはできない／ならば ここに／／花を植えよう〉（工藤直子『花』）

何百万人の読者へ ハッピーニューイヤー

おいらを支えてくれた詩が 大切な言葉が

……ふふふ、ノーカット 鎮座ましまし

スクランブル交差点の真ん中で

耳を塞いでしゃがみ込んだあなたと

人に流れに逆らって立ち尽くすおいら

狂気にまみれた六道を走り抜けられるのか
人生の第四コーナーに突っ込めるのか
詩のエールを裸身で受けながら

100回目の漆黒の朝が過ぎ去り

1万回目のまばゆい夜が訪れても

叫び 嘆き 嗚咽が残響する わが戦場

鳴り続ける通信社の速報のサイレンは

成仏した亡者を叩き起こしていく

〈ガザ病院が爆発 471人死亡〉

〈ロ兵1600人「虐殺」関与か〉

あかめろな おいらの暴れ竜は意気消沈

だから 紙面の隅っこに しめやかに『花』

たまにはいいよね ヘンシユウ長殿

こんな 刺的な 史的な 私的な 死的な

〈一隅を照らす〉詩的な 自慰行為

新聞が葬り去られ

正義の言葉が逝き

自由が踏みつぶされ

萬神が集う聖地から「キボウ」が逃げ出し
それでも、言葉の鬼火を探すというのか

〈おいらは何に耐えているんだろう〉

食いいしばって 崖つぶちで踏ん張って

齒はボロボロ 足の裏は血が滲み

痛苦の快楽に堕しながら問わず語り

〈おいらは何かと闘っているのだろうか〉

その詩人氣取りのスカしたあんちゃん

あんたの詩は誰かの闇を照らしているのかい

チカや タミオや ケンジのように

天地が崩れ落ちた絶望の先を書いているかい

おいら？ そうだねえ……

新聞の片隅に 緋いガーベラの種を蒔くよ

春の訪れ

大元無爲

まず一面に目を通す
そしてページをめくる
とたんに鼻がムズムズ
くしゃみもでる

新聞に乗ってわが家に侵入したのは何者か
目にはさやかに見えねども
その正体はスギ花粉
もう春なんだな

新聞はニュースとともに
花粉も一緒に届けてくれる
ありがたくはないけれど
いつも春は新聞に載ってやってくる

死語

大元無爲

〈はじめにロゴスありき〉

言葉は大切だ

そして生きている

生きているということは死するものでもある

〈歌は世につれ世は歌につれ〉

言葉もまた然り

〈うたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし〉

新しく生まれた流行語が時を経て死語と化す

これも世の定め

言葉の無常

かつて原稿を書くとき、迷った記憶がある

男女の二人連れを〈アベック〉と書こうとして、ふと思った

ちよつと古臭いのではないか

そして〈カップル〉とした

いまは〈カップル〉も古いのか

振り返ると〈ナウい〉とか〈ヤング〉なんて使っていたなあ

少々、顔が赤らむ

ただ、すたれたとしても、流行語はその時代の思い出として生き続ける

流行語ではなくても、死語と化している言葉がある

言葉の内実が空疎化してしまったものだ

たとえば〈選良〉

人々から選ばれたすぐれた人

とくに代議士を指すとか

昨今の政治家

〈選良〉と呼ぶにふさわしいか

残念ながら、ほとんど見聞きすることがなくなってしまった

言葉の責任ではなく、〈選良〉と呼ばれなくてはいけない人たちの責任

もうひとつ

〈社会の木鐸〉

世の人々を目覚めさせ教え導く人

新聞、あるいは新聞記者のことでもあった

他者のことばかり言っではいられない

果たして新聞は〈社会の木鐸〉になりえているのだろうか

いまだ信頼性は高いようだが、どの新聞も部数は下り坂

世の人を覚醒させるということでは、ときに過激な〈文春砲〉にかなわない

そもそも〈社会の木鐸〉であろうなんてことがおこがましい

そんな声も聞こえてくる

しかし、あえて自らに問いかけてみる

私は〈社会の木鐸〉たらんと志したのか、と

人と紙(神)のつぶやき

鎌田東二

朝が来る

暗いうちから新聞が配達される

むかしのひとは つぶやく

ありがとう 配達屋さん

自転車で バイクで

それぞれの乗り物で配って歩く

すごいなあ

ありがたいなあ

まずは 感謝

そして じっくりと新聞を読む

まさに「新」の「聞」

それも近代の「神」である「紙」に印刷されて

だから 何度でも読むことができる

今は 新聞を買わずに ネットニュースを「見る」人が多い
吾もネットニュースをちよくちよく「見る」けど

じっくり読もうと思ったら、ワードに貼り付けて、それを読む

でも PCではうまく赤ペンとかで 自在に赤線を引いたり

汚い字でコメントすることが できない

残念だなあ

その「神―紙」の媒体・霊媒・メディアをなくしていくのは

「吾輩は紙である」

紙から見た人間を吟味してほしいなあ

ニンゲンは 横柄だ とても

「神・紙」を足で踏みつけて 平気だもん

やさしくないよ

ものに

活字を書いてあるもの 本

食べ物を容れるためのもの 食器

人間を容れるためのもの 家

音楽を容れるためのもの CDやむかしのレコード

そして 現代のいろいろな人を容れるためのもの TV

そして そして・・・

いやだなあつらいよ じゃけんにあつかわれるのは

もつと ていねいに だいじにして ほしいなあ

ソフトタッチで なにごとも

こころおだやかに

そして 切り抜きなんか してくれと うれしいなあ

ほっこりするんだ ところが

ドキドキするんだ 心臓が

ぼくにも ころもからだも心臓もあるんだよ

単なる「情報」じゃありません

「いのち」と「なさけ」がかよってるんだ

そこをかんじてくれる「情報」が どれだけあるのか？

そう

「読み手」がいれば 「書き手」がいる そしてその「出し手」がいる

そして 「配り手（配り足手？）」がいて はじめて「とどく」のだ

「世の中」は複雑系だ

単純じゃない

でもね

とても複雑だけど

その複雑系は 単純なころやものが組み合わさって 組み合わさって 組み合わさって 組み合わさって 成り立っている

面白いね

そんな 複雑系と単純相をつなぐ「神・紙」よ
いのちを吹き込め

息を吹き込め

「ことたま」を ふきこんでよ！

がんゆうしじんは そう さげびたい

くまほうどう くまそうどう くまとうそう

鎌田東二

熊報道がすごい 被害がひどい
だが 熊もひめいをあげてるかも

そうにちがいない

吾が熊だったら悲鳴を上げる前に 怒って怒って怒りまくるだろう
好き勝手に森を壊していったニンゲンどもに

おれたちの悲鳴は 悲哀と悲嘆と怒りの結晶なんだぜ

ただの悲鳴とおもうなよ

ただの怒りとおもうなよ

それは悲痛を通り越した非通の絶叫なんだ

絶体絶命の雄雌叫び おめたけび なんだよ

もう あとはない という 警告と絶望の 遺言なんだ

熊の辞世の句

ニンゲンどもよ

動物たちのこの 辞世の句を聴け！

みみ かつぽじって よくきけ！

みのみ ほんとうのみみをもって きいてくれ

おまえらが なにをしでかしたか

森にも 海にも 山にも 里にも

何を してきたのか

押し付けてきたのか

変形加工し 破壊し 消費し 工作して 好き勝手をしでかした

おれは ゆるせん

くまだけじゃねえ

オオカミも やまいぬも いのししも しかも さるも みな そう言ってる

聞け！ ニンゲンどもよ！

みみかつぽじって 体の奥の本当の身身で聴くのだ

ほんとうの終わりが来る前に

もう終わりは来てる

だが おまえたちは わかつちゃいねえ

が 森のいのちは とうに わかつてる

もう おそいんだよ

おそいが おそすぎるが

しかし さいごのてだしも てあても ひつようなんだ

おれたちも さいごの てだしをしてるんだ

そのおれたちのさいごのことばと手出し口出しの悲痛と非通の悲鳴を聴け！

新聞報道よ
まじめに
書き曝せ！

いかり

鎌田東二

狂いも生やさしくないが
怒りも生やさしくない

スサノヲは啼いた

その啼きいさちりは悲しみと怒りだ

怒りを抑えよという

怒りを鎮めよという

はたしてそれでよいのか？

いや、怒りを明確に発現すべきではないか
しばしば つよく そうおもう

もう よそう

怒りを鎮めようなどと 人間らしいふるまいをするのは

もう いいよ

そんな人間尺度や人間配慮は

もう ニンゲンをぬぎたいよ

ニンゲンをおさらばしたいよ

離脱したい

本務に戻りたい

本来に立ち返りたい

そんなおもいに かられている

いかりを いかりとして てばなそう

てんに ちに じんに

天地人に怒りを手放す 解き放つ

受け取れ 天よ！

受け取れ 地よ！

受け取れ 人よ！

天地にうらみはない

が 人には失望と怒りが渦巻く

それを抑えることは 天地にさらなる混乱をもたらしかねない

やだなあ

やだね

でも
ね

それしかないんだよ

1, 記事

「襲われた女性 恐怖語る」 京都新聞 2023年9月2日朝刊記事

「まさかクマが出るとは」「死ぬかもしれないと思った」。8月中旬に比叡山の山中（京都市左京区修学院）でツキノワグマに襲われ、腕や顔などを負傷した市内の弾代女性がこのほど、京都新聞社の取材に応じた。府内でクマによる人的被害は本年度初めて。生々しい傷が今も残る中、女性は緊迫の状況を振り返った。（堤冬樹）

女性は山中を走るトレイルランナー。8月11日朝から、市内を囲むトレッキングコース「京都一周トレイル」の東山コースを1人で北へ縦走していた。

暗くならないうちに帰るため、ケープル比叡駅（地図①）付近で折り返した。だが午後3時過ぎ、修学院の登山道・雲母坂（きららざか）に向かう途中で事態が暗転する。

往路の東山コースと違う道で行こうと、過去のトレラン大会でも走ったルートを選んだ。やがて分岐に差しかかり、女性にとって初めての道へ。ふと気づくと、わずか5分ほど先にクマの親子がいた（地図②）。立ち上がった親グマは約1歳50センチ、娘とにかくびっくりして体が固まってしまった。死ぬかもしれないと思った」と絶望

感が押し寄せた。

クマが逃げ出してくれたら……。わずかな望みを託して大声を上げたが、ひるむ様子は見られない。一気に距離を詰められ、左手の親指をかまれた。女性は無意識のうちにしゃがみ込み、両腕で頭や首を守るような姿勢に。クマに覆いかぶさられ、左腕や右耳付近にも傷を負った。少ししてクマが離れた隙に女性はそこから引き返し、別ルートを走って下った。痛みを耐え、「助けてー」「誰かいませんか」と声を張り上げながら。指や耳がちゃんと付いているか心配だったが無事で、東山コースまでたどり着いて110番した(地図③)。

この女性の叫び声を聞いたのが、近くの東山コースを登っていた鎌田東二さん(72) 〓左京区〓だった(地図④)。比叡山には800回以上訪れているが、助けを求める声を耳にするのは初めて。「最初は冗談だと思ったが切実感があつた」

声のした尾根の方へ向かい、約半分後、東山コース上にいる女性を発見(地図⑤)。「青ざめた表情で血も流れていたが、話をしている間に少し安心された様子だった」と振り返り、女性も「人と会えたことでほっとした」と語る。警察や消防とやりとりし、発生から1時間半近くたった午後4時半ごろ、梅谷林道で消防隊員らと合流した(地図⑥)。その後、近くの病院で左手の親指や左腕、右耳付近を縫った。2週間以上たっても痛みは残り、腕の傷口はうんでいて通院を続けているという。

2、取材を受けて

これが地元の京都新聞記事の一部である。また、関西のテレビ局2社からも取材を受け、「クマに襲われた女性を救出した地元の人」ということで放送され、少しばかり話題になった。

本とかイベントとか以外で取材を受けるのも報道されるのも初めてのことで「おもしろかった」が、被害者の女

性には気をつかった。どこまでどのように話すかなど慎重に言葉を選んだが、報道されたところは各社チェックの上だろうから問題のないところだったのだろう。

取材を受けながら、「取材」というものの新聞とテレビの違いを面白く思った。新聞は言葉しかない。もちろん、写真や地図は掲載されるが、主たるメッセージは言葉だ。

だが、「」には映像という武器があり、そこに話者（インタビュイー）の言葉も組み込まれている。極端に言えば、言葉は場（地・環境）の中に埋没している。

それに対して、新聞記事は、言葉という「柄」が場なしで登場することができるので、その場をインタビュアー（取材する主体の新聞記者）の言葉で埋める必要がある。したがって、その言葉のメリハリや際立ちが重要になる。話者の言葉を生かすも殺すも、取材者の言葉の前フリと後フリでまったく変わる。

「言葉は凶器である」と思わざるを得ない。

3、事後の考察

- ① 「事件」や「事故」が起こる。
- ② 消防や警察など救出隊が駆けつける。人命救助が第一だから。
- ③ 事故者は、病院や診療所で手当てを受け、警察の事情聴取を受ける。
- ④ その時点で、報道関係者が事態の大小を想定判断しながら駆けつけ、各所・各人に取材を始める。そして、その日の内か翌日には記事として「出荷」される。

ここには、「時間差（タイムラグ）」と「状況差（シチュエーションラグ）」がある。
そして、「当事者性」の差異がある。

この「当事者性」が曲者だ。上記の記事では、私はクマに襲われた女性ではない。その女性の「第一発見者」に過ぎない。それを「救出者」と判断し表現するのは誰か？ 消防隊員か？ 警察署員か？ 病院の医師や看護師か？ それとも、新聞記者や「TV取材者か？

判断は、さまざまなところでなされる。表現もさまざまなところでなされる。その際に、それぞれの「場所」で、それぞれの「言葉」が用いられ、時に「共有」され、「反芻」される。

言葉で「ピン止め」された「現実〓事実（とやら）」は、案外、というか、当然の如く、「二面的」である。だからこそ、「批評」や「考察」が必要となる。（本文がその「考察」に値するものであるかどうかは別にして）

みなさん 天気は死にました！

注（１）京都新聞2023年9月2日付け朝刊記事、毎日放送2023年10月18日放送 京都でも『腕や耳が血だらけに』クマ出没増：被害者を救助した人が語った壮絶な状況（MBS ニュース）

ス）<https://www.mbs.jp/news/kansainews/20231024/GE00053192.shtml> 関西テレビ2023年10月20日
「news ランナー」放送 <https://youtu.be/K48I7usPyt8>

編集後記

新川亮（あらかわ・まこと） 某通信社記者。大学で文化人類学を学び、約半年間、アフリカ・マラウイで呪術医が人々の病いの経験を構築していく実践を研究。記者歴は約10年。言葉が現実をつくり出すという意味では、アフリカの呪術医が行っていることと、マスメディアがやっていることに大きな差はないのではないかと感じる今日この頃。「自由になるために詩を書いている」というある作家の言葉に感化され、最近詩を書き始めた。文章を書くことで、自分たちが生きるこの世界のことをとことん考えてみたいと思っている。

田宮ケンジロウ（たみや・けんじろう） 〈「詩のように記事を書きたい」／憎しみ、と 哀しみ、と 悪意に支配された／ニューズペーパーの片隅に／蠟燭の灯のような詩があったらステキだから（後略）〉

（本紙掲載詩「新聞紙の片隅に」より）

などと夢想して、「詩のような」記事を書く、大抵はデスク（文化部でさえ！）に「意味が分からない」とけちよんけちよんに直され、味気ない説明文と化します。「行間で伝わるでしょ」「想像力ないの？」と当方は言いたいが、短詩型文学の素養、嗜好のない御仁には暖簾に腕押し、負け犬の遠吠え。己の文章力のなさを罵倒されるのがオチ。もう少し、短詩型文学に明るいデスクが増えないものかとつくづく思う。ということで新年三が日にデスクとして自分が担当するコーナーに工藤直子の詩「花」を載せてしまった。読者から何通かお手紙が届きひと安心。読者の文学的センス、侮ることなかれ。

大元無爲（おおもと・むい） 先日、他社の記者仲間の△さんと雑談していて、山本周五郎の話になりました。

△さんは昨年刊行された周五郎のムック本の執筆者の一人で、戦後、周五郎が暮らした横浜ゆかりの地を取材したというのです。

「その時、訪ねた場所のひとつが、一時期、仕事場としていたところ。周五郎の自宅に隣接するお宅の離れで、築90年は経っているそうだけど、まだ残っていたのには驚いたね」とAさんは語っていました。

実は、駆け出し時代のAの数年前、私はこの離れに1年ほど下宿していたのです。当時、大家さんから「真夏に雨戸を閉めきって『柳橋物語』の火事のシーンを書いていた」といった話を聞いた記憶があります。『青べか物語』や『赤ひげ診療譚』は読んでいたので、えらく感動したものです。

Aさんの話で、私の横浜の思い出もよみがえってきました。周五郎作品とは、かなりご無沙汰してしまいましたが、改めて文庫本を何冊が買い込み、読み始めているところです。

鎌田東二（かまた・とうじ） 激しい憤りにかられている。ある出来事がきっかけで、抑えに抑えていた憤怒が爆発した。それを悟りすまして、一切皆苦とか諸行無常と言ってまあまあで済ませたくない。ニンゲンの愚かさ、我欲、我執。世界中に吹き荒れている「不都合な真実」の根っこに、仏教でいうところの煩惱、妄執がある。不動明王は憤怒相だ。大日如来の化身として、その持てる三鈷の俱利伽羅剣と絹索をもって調伏教化する。その真言「ノウマク サンマンダ バザラダン センダ マカロシヤダ ソワタヤ ウンタラタ カンマン」は、すべての諸金剛に礼拝す。怒れる憤怒尊よ、碎破せよ！」という意味を持つ。今、私はしんそこ不動明王になりたい。

父は昭和10年ごろ、満州で航空兵だった。昭和16年には陸軍宇都宮陸軍飛行学校名取校で特訓を受けていた。私はこれまで「スサノヲの子分」を自称してきたが、父親から同期の航空兵がみな特攻隊で死んだと耳にしたことができるほど聞かされたせいで、父鎌田義美の怒りと悲しみを受け継いでいると今さらながら感じる。



出口王仁三郎作 楽焼茶碗

二〇二四年七月七日
編集・発行 新聞詩倶楽部